

はじめに

藤田 佳久

愛知大学東亜同文書院大学記念センター長



「愛知大学東亜同文書院大学記念センター・オープンリサーチ・センター年報」第4号をお届けする。

オープンリサーチ・センター事業も4年目を終え、残すところあと1年になった。3年目を終えるにあたり、文科省へ提出した中間報告は「A」評価を伝えられ、当センター事業がその努力を評価されたということで、4年目はさらに力が入った。

その「A」評価の付加内容に、より一層の研究拠点をめざされたい、という一文が添えられていたが、折しも4年目のシンポジウムは国際シンポジウムで、しかもそのテーマは「欧米研究者がみた東亜同文書院」であり、2年目に中国の研究者たちと合同で行ったシンポジウムとともに評価「A」に付された提言を先取りする形で国際的な拠点への歩みを示したといえる。欧米研究者の視点は日中研究者の視点とは異なり、よりグローバル的な意味を含んでおり、書院の存在が欧米にそれなりのインパクトを与えていたことの指摘は新鮮であった。詳細は本編をご参照いただきたい。また、国際化に関係して、1カ月間だけではあったが、中国・上海から若い研究者を招き書院研究をすすめてもらう機会もつくった。これも今後の書院研究の国際的拠点としての試みにあたるといえよう。

また、本年度は神戸の国際会議場で展示会と講演会を行った。講演会は「孫文—神戸・長崎そして東亜同文書院、愛知大学—」で、当センターが有する孫文関係の資料展示もふまえ、地元神戸の孫文記念館の資料提供や館長安井氏の講演も加え実施した。

これで展示会は横浜、東京、弘前、福岡、シカゴに次いで6回目を数え、各地の人々との交流も広がり、書院さらに愛知大学の名も広く知ってもらえるようになった。根津院長の親戚の方も最終日にかけてくれ、思わぬ交流ができた。また、愛知県小坂井町からの文化祭への出展要請があり、書院の展示を行ない、ローカルな広がりもみせた。

そのほか、書院卒業生や愛知大学初期の卒業生による講演会、研究会なども順調に行なわれ、この年報（4号）のほか、ブックレット『愛知大学史研究』第3号の出版物なども順調にすすんで。若手研究者たちも着実にその歩みをすすめてきた。また、当センター展示室への来訪も着実にふえ、海外からの来訪者や取材もあった。「友の会」を介して地元中学生の見学を含め、地域とのつながりも高まりつつある。